





# 行詰れる伯國珈琲界

輸出減少は

伯國品だけ

伯國珈琲の行詰りを被すて云ひ  
古まれたとあるが、一九三〇年二千二百萬俵の生産額に對する輸出一千七百万俵のところ  
在荷量二十四百万俵を増せ  
るに輸出は却つて一千四百万俵と減じてゐる

## 犠牲の負擔

聖州に偏重

世界的クリーゼ因る消費  
力の減退であつて、一千三百五十九万一千俵  
あつた世界消費量は翌年減產  
二千三百七十二万三千俵に減  
じてゐる、加ふるに一二七  
八年時代におけるブラジル  
政府の採用せる市價維持策によ  
り他生産國々に刺戟して著しく  
栽培面積擴張され其生産額  
も從來八百万俵前後のもの三  
二十三年度に至り一千万俵を  
超え年度は約一千万俵と云  
流れである、而も此等生産額  
して他生産國々上にも利して  
ある狀態に在る。

世界の消費市場に對する供給状態は左の如きである  
三月三十一日現在指數  
在荷激増す

## 諸外國の對伯投資

利子年一億三千万ドル

世界の消費市場に對する供給状態は左の如きである  
在荷激増す

## 聖州輸出高

内國咖啡院赤五月、一九三三一  
三四年度収穫額に對し其四〇

世界の消費市場に對する供給状態は左の如きである  
在荷激増す

## 聖州輸出高

内國咖啡院赤五月、一九三三一  
三四年度収穫額に對し其四〇

世界の消費市場に對する供給状態は左の如きである  
在荷激増す

近刊の英紙「ゼ・エコノミスト」  
の調査によれば九二三一五の  
三ヶ年間平均物價并れ在荷高  
一〇〇とする世界主要農産物の  
半値を減せるに他生産國並  
てをり、結果此減少額は全部ア  
ラジルが負擔してゐるのである  
左通りである

## 珈琲の變遷

アメリカの

世界の消費市場に對する供給状態は左の如きである  
在荷激増す

即ちオーストリアを除けばサンパウロの貿易量最も低い被拘らず  
總ての貿易サンパウロにのみ通じる負担不當でない証との  
其在荷四倍に増加せず市價低落するに於ても此說を  
支持し代表者の名を交えて内國領  
支那最も低くこと証明さる、  
下落最も速くこと証明さる、  
十万俵を焼却せる紅今年度の生  
産過剰珈琲は猶七百万俵に上り  
輸出は既に六百五十五万俵を上り  
見込立てもないものである

半度と比較すれば著しく減退  
五十八万二千、トスに比べて  
三三ントス餘、輸入三十九万一  
千五百七十、コントスで他の諸  
州と比較に最も輸出超過する  
上ものである

六月財務調査委員會より聯邦政府  
府に提出せる報告書に記載せる  
ば外債殆んど英領であることを  
注意すべき點で、英領からの輸  
入額及ベセンチメートル  
三、三千封度、毎四分  
六、六千封度、毎二分  
リカ農務省の公報せる所によれば  
五百磅の定期英貨公債は九三一  
年一月より償還を開始し去卅  
年、一四年度に於ては全額償還し  
たのであるが、トス港封鎖にて  
輸出に代價の名を交えて内國領  
のみ僅五十万郎貿上品の單  
價を引上げて貿ひたいと云つて  
居る見込立てもないものである

米國依然第一の顧客であるが  
昨年度國別  
聖州輸出高  
昨年度海運貿易は二ヶ月  
正直の政策と、トス港封鎖にて  
輸出に代價の名を交えて内國領  
ののみ僅五十万郎貿上品の單  
價を引上げて貿ひたいと云つて  
居る見込立てもないものである

六月財務調査委員會より聯邦政府  
府に提出せる報告書に記載せる  
ば外債殆んど英領であることを  
注意すべき點で、英領からの輸  
入額及ベセンチメートル  
三、三千封度、毎四分  
六、六千封度、毎二分  
リカ農務省の公報せる所によれば  
五百磅の定期英貨公債は九三一  
年一月より償還を開始し去卅  
年、一四年度に於ては全額償還し  
たのであるが、トス港封鎖にて  
輸出に代價の名を交えて内國領  
ののみ僅五十万郎貿上品の單  
價を引上げて貿ひたいと云つて  
居る見込立てもないものである

六月財務調査委員會より聯邦政府  
府に提出せる報告書に記載せる  
ば外債殆んど英領であることを  
注意すべき點で、英領からの輸  
入額及ベセンチメートル  
三、三千封度、毎四分  
六、六千封度、毎二分  
リカ農務省の公報せる所によれば  
五百磅の定期英貨公債は九三一  
年一月より償還を開始し去卅  
年、一四年度に於ては全額償還し  
たのであるが、トス港封鎖にて  
輸出に代價の名を交えて内國領  
ののみ僅五十万郎貿上品の單  
價を引上げて貿ひたいと云つて  
居る見込立てもないものである

六月財務調査委員會より聯邦政府  
府に提出せる報告書に記載せる  
ば外債殆んど英領であることを  
注意すべき點で、英領からの輸  
入額及ベセンチメートル  
三、三千封度、毎四分  
六、六千封度、毎二分  
リカ農務省の公報せる所によれば  
五百磅の定期英貨公債は九三一  
年一月より償還を開始し去卅  
年、一四年度に於ては全額償還し  
たのであるが、トス港封鎖にて  
輸出に代價の名を交えて内國領  
ののみ僅五十万郎貿上品の單  
價を引上げて貿ひたいと云つて  
居る見込立てもないものである

六月財務調査委員會より聯邦政府  
府に提出せる報告書に記載せる  
ば外債殆んど英領であることを  
注意すべき點で、英領からの輸  
入額及ベセンチメートル  
三、三千封度、毎四分  
六、六千封度、毎二分  
リカ農務省の公報せる所によれば  
五百磅の定期英貨公債は九三一  
年一月より償還を開始し去卅  
年、一四年度に於ては全額償還し  
たのであるが、トス港封鎖にて  
輸出に代價の名を交えて内國領  
ののみ僅五十万郎貿上品の單  
價を引上げて貿ひたいと云つて  
居る見込立てもないものである

六月財務調査委員會より聯邦政府  
府に提出せる報告書に記載せる  
ば外債殆んど英領であることを  
注意すべき點で、英領からの輸  
入額及ベセンチメートル  
三、三千封度、毎四分  
六、六千封度、毎二分  
リカ農務省の公報せる所によれば  
五百磅の定期英貨公債は九三一  
年一月より償還を開始し去卅  
年、一四年度に於ては全額償還し  
たのであるが、トス港封鎖にて  
輸出に代價の名を交えて内國領  
ののみ僅五十万郎貿上品の單  
價を引上げて貿ひたいと云つて  
居る見込立てもないものである

六月財務調査委員會より聯邦政府  
府に提出せる報告書に記載せる  
ば外債殆んど英領であることを  
注意すべき點で、英領からの輸  
入額及ベセンチメートル  
三、三千封度、毎四分  
六、六千封度、毎二分  
リカ農務省の公報せる所によれば  
五百磅の定期英貨公債は九三一  
年一月より償還を開始し去卅  
年、一四年度に於ては全額償還し  
たのであるが、トス港封鎖にて  
輸出に代價の名を交えて内國領  
ののみ僅五十万郎貿上品の單  
價を引上げて貿ひたいと云つて  
居る見込立てもないものである

六月財務調査委員會より聯邦政府  
府に提出せる報告書に記載せる  
ば外債殆んど英領であることを  
注意すべき點で、英領からの輸  
入額及ベセンチメートル  
三、三千封度、毎四分  
六、六千封度、毎二分  
リカ農務省の公報せる所によれば  
五百磅の定期英貨公債は九三一  
年一月より償還を開始し去卅  
年、一四年度に於ては全額償還し  
たのであるが、トス港封鎖にて  
輸出に代價の名を交えて内國領  
ののみ僅五十万郎貿上品の單  
價を引上げて貿ひたいと云つて  
居る見込立てもないものである

六月財務調査委員會より聯邦政府  
府に提出せる報告書に記載せる  
ば外債殆んど英領であることを  
注意すべき點で、英領からの輸  
入額及ベセンチメートル  
三、三千封度、毎四分  
六、六千封度、毎二分  
リカ農務省の公報せる所によれば  
五百磅の定期英貨公債は九三一  
年一月より償還を開始し去卅  
年、一四年度に於ては全額償還し  
たのであるが、トス港封鎖にて  
輸出に代價の名を交えて内國領  
ののみ僅五十万郎貿上品の單  
價を引上げて貿ひたいと云つて  
居る見込立てもないものである

六月財務調査委員會より聯邦政府  
府に提出せる報告書に記載せる  
ば外債殆んど英領であることを  
注意すべき點で、英領からの輸  
入額及ベセンチメートル  
三、三千封度、毎四分  
六、六千封度、毎二分  
リカ農務省の公報せる所によれば  
五百磅の定期英貨公債は九三一  
年一月より償還を開始し去卅  
年、一四年度に於ては全額償還し  
たのであるが、トス港封鎖にて  
輸出に代價の名を交えて内國領  
ののみ僅五十万郎貿上品の單  
價を引上げて貿ひたいと云つて  
居る見込立てもないものである

六月財務調査委員會より聯邦政府  
府に提出せる報告書に記載せる  
ば外債殆んど英領であることを  
注意すべき點で、英領からの輸  
入額及ベセンチメートル  
三、三千封度、毎四分  
六、六千封度、毎二分  
リカ農務省の公報せる所によれば  
五百磅の定期英貨公債は九三一  
年一月より償還を開始し去卅  
年、一四年度に於ては全額償還し  
たのであるが、トス港封鎖にて  
輸出に代價の名を交えて内國領  
ののみ僅五十万郎貿上品の單  
價を引上げて貿ひたいと云つて  
居る見込立てもないものである

六月財務調査委員會より聯邦政府  
府に提出せる報告書に記載せる  
ば外債殆んど英領であることを  
注意すべき點で、英領からの輸  
入額及ベセンチメートル  
三、三千封度、毎四分  
六、六千封度、毎二分  
リカ農務省の公報せる所によれば  
五百磅の定期英貨公債は九三一  
年一月より償還を開始し去卅  
年、一四年度に於ては全額償還し  
たのであるが、トス港封鎖にて  
輸出に代價の名を交えて内國領  
ののみ僅五十万郎貿上品の單  
價を引上げて貿ひたいと云つて  
居る見込立てもないものである

六月財務調査委員會より聯邦政府  
府に提出せる報告書に記載せる  
ば外債殆んど英領であることを  
注意すべき點で、英領からの輸  
入額及ベセンチメートル  
三、三千封度、毎四分  
六、六千封度、毎二分  
リカ農務省の公報せる所によれば  
五百磅の定期英貨公債は九三一  
年一月より償還を開始し去卅  
年、一四年度に於ては全額償還し  
たのであるが、トス港封鎖にて  
輸出に代價の名を交えて内國領  
ののみ僅五十万郎貿上品の單  
價を引上げて貿ひたいと云つて  
居る見込立てもないものである

六月財務調査委員會より聯邦政府  
府に提出せる報告書に記載せる  
ば外債殆んど英領であることを  
注意すべき點で、英領からの輸  
入額及ベセンチメートル  
三、三千封度、毎四分  
六、六千封度、毎二分  
リカ農務省の公報せる所によれば  
五百磅の定期英貨公債は九三一  
年一月より償還を開始し去卅  
年、一四年度に於ては全額償還し  
たのであるが、トス港封鎖にて  
輸出に代價の名を交えて内國領  
ののみ僅五十万郎貿上品の單  
價を引上げて貿ひたいと云つて  
居る見込立てもないものである

六月財務調査委員會より聯邦政府  
府に提出せる報告書に記載せる  
ば外債殆んど英領であることを  
注意すべき點で、英領からの輸  
入額及ベセンチメートル  
三、三千封度、毎四分  
六、六千封度、毎二分  
リカ農務省の公報せる所によれば  
五百磅の定期英貨公債は九三一





# 虚偽の多數黨に 政權がうつれば

それは憲政破壊道だ！

愕堂翁時局を語る

新映画紹介  
「暗黒街の顔役」

ユナイト映画  
SCAR FACE

近頃は「地獄の天使」「犯罪都市」等を世に出した名製作者ハーレー・ヒューズ、新聞記者より

「モロッコ」「上海特急」で名だ

トとの製作スタッフは堂々たる

「モロッコ」

でシカゴのギャング通りを以て鳴

るベニーハットの脚色、「曉の偵

察」のハワードホーク監督、アンド

ラウドソノンターライ、アンド

スラウドソノンターライ

が最も興味あるのは主

かものだ。が最も肝腎なのは主

Bと共に存してを、ヴィタミン

の含有量が多いほど酒

落(腐敗)するといわれてゐる

が、酒の病氣の原因は火薙菌によつて殺された

現在全國の酒造高約四百万石

の中約三、四%は貯蔵中と火

薙菌をおぼすと云ふが、それが原因で、これが繁殖するから

かものだ。

</



# NIPPAK SHIMBUN

Jornal Japonez de maior circulação no Brasil

Anno XIX

São Paulo - Quinta-feira, 8 de Junho de 1933

Num. 836

## NIPPAK SHIMBUN

Diretor-Proprietário:  
SACK MIURA

Redactor da pagina brasileira: José Solé

Redação: Administração e Oficinas:  
Rua da Liberdade, 144-A e 146  
Caixa Postal, 375  
Telephone 2-3926  
Endereço Telegráfico: "Nippak"  
SÃO PAULO - Brasil

ASSIGNATURAS  
Para o Brasil

Por anno . . . . .	300\$000
Por semestre . . . . .	16\$000
Numero aviso . . . . .	\$500
Para o Exterior . . . . .	
Por anno . . . . .	60\$000

### Annuncios

Temos á disposição dos interessados uma tabela completa de preços para annuncios nesta folha. Telephone 2-3926

## Visita e excursão do Embaixador do Japão ao Estado de S. Paulo

A visita que s. exia. o Embaixador do Japão no Brasil sr. Hayashi vinha fazendo ao Estado de S. Paulo, e que deveria terminar a 6º corrente teve o seu termo abreviado de alguns dias por motivo de ligera enfermidade do ilustre diplomata.

S. exia. regressando de Juquía a S. Paulo, via Santos, embarcou segunda-feira para o Rio de Janeiro, dando por terminada a sua viagem e excursão ao Estado paulista.

Compareceram á Estação do Norte em despedida, o capitão Oswaldo Melchiades de Almeida, chefe da Casa Militar da Interventoria, que foi representar o sr. general Waldomiro de Lima, interventor Federal em São Paulo; os srs. directores das Secretarias de Estado, e das autoridades federais, consul do Japão e outras pessoas.

No pnto fronteiro á Estação do Norte formou um destacamento da Guarda Civil, acompanhado da respectiva banda de musica, que prestou a s. exa. as honras a que tem direito.

## O "Montevideo Maru" em Santos

Desembarcaram no porto de Santos, sexta-feira proximo passada, procedente de Kobe, a bordo do vapor "Montevideo Maru", 816 imigrantes agricultores japoneses, que se destinam á lavra, no interior de nosso Estado.

Durante a viagem do "Montevideo Maru", faleceram a bordo os menores Yakuhi Tohiko, Nishimaki Hatsue e Misuno Michio e nasceu Oshima Sokiko, filha de Takeji Oshima e Fumiko Oshima.

## Novos consulados no Brasil

Na ultima reunião do Ministerio, o ministro dos Negocios Estrangeiros expôz o programa que vise ser iniciado para estreitar ainda mais os laços de amizade e economia entre o Japão e o Brasil, constando desse mesmo programa a criação de novos consulados em territorios brasilienses.

Ao que consta para principiar será inaugurado em Belém do Pará o primeiro desses consulados.

## Noticias e telegrammas do Japão

(Serviço especial do NIPPAK SHIMBUN e dos jornais)

### O plano quinquenal para obter a economia da importação do trigo estrangeiro

A época é dos grandes empreendimentos. Assim o entendeu o governo japonês que procura obter o maior rendimento possível de suas terras.

A agencia United Press dá-nos a conhecer pelo telegramma abaixo os trabalhos e resultados já obtidos.

TOKIO, 2 — O plano quinquenal japonês, para aumentar a colheita do trigo, está dando sensíveis resultados, embora tenha sido iniciado relativamente há pouco tempo, ou seja no ultimo outono.

Conduz directamente a campanha o Ministerio da Agricultura e das florestas, esperando os respectivos técnicos que a colheita esteja este mês terminada em todo o território cerealífero do país, inclusive os distritos do norte, entre elles o de Hokkaido.

Trata-se de obter que a economia nacional fique completamente autónoma da importação do grão estrangeiro, a qual, no ultimo ano fiscal, atingiu a 5 milhões de koku. Pesam os peritos do Ministerio que ao cabo de cinco anos, a área do trigo terá conquistado mais 200 mil ch bu, para usar a medida agraria indígena, o que proporcionará um rendimento de mais de 3 milhões de koku do precioso grão. O indispensável estímulo governamental aos plantadores veio na forma de um subsidio anual de 1 milhão e 700 mil yens.

Antes da campanha ter um ano de iniciada, esperam as autoridades um aumento de 100 mil ch bu na área plantada, de modo a elevar a colheita de 1 milhão de koku.

A maior dificuldade a vencer reside nas relações entre os plantadores e as empresas de moagem, o que levou muitos deles a só plantarem para o consumo próprio, e outros a se meterem no comércio de reduzir o grão à farinha.

São outros tantos problemas a preocuparem os técnicos, que estão cogitando de instituir feiras nos distritos agrícolas, afim de encorajar o plantio de trigo de qualidade superior, com a distribuição de melhores sementes, o que não poderá deixar de se reflectir na qualidade da farinha.

### Protesto contra os direitos aduaneiros chineses

Junto ao governo de Nankim foi feito um energico protesto pelo governo japonês ao governo de Nankim contra os direitos aduaneiros julgados prohibitivos, impostos pela China, desde 22 de passado. Os japoneses afirmam que os direitos em questão visam principalmente as mercadorias nipponicas, sobretudo os produtos das industrias de algodão, fa, seda e seda artificial.

No ultimo caso o aumento de direito é de 150 %.

O governo japonês protestou igualmente contra as medidas de que se cogitam na China para combater o "dumping".

### Falecimento de um general

Um laconico telegramma de Tokio trouxe-nos a infesta noticia do falecimento do illustre general Kanaya, que chefiou o estado maior japonês quando irrompeu o conflito sino-japonês.

### Arrojo de um jornalista japonês

Não ha muito publicamos nestas columnas o arrojo e coragem de um pescador japonês que desceu á profundezas de uma cratera para trazer á tona o corpo inerte de uma infeliz donzella que allí perdera a vida.

Agora o telegrapho nos traz outra prova de arrojo de um jornalista, também japonês, que pretende estudar os mistérios do Miharayama.

«O redactor-chefe do "Yomiru" conseguiu, penetrar, sem grande dificuldade, no interior do vulcão Miharayama, situado na pequena ilha de Oshima, ao largo da peninsula de Izú. O intrepido jornalista, que utilizou uma espécie de galão especial, desceu até 360 metros de profundidade e permaneceu durante oito minutos no interior da cratera, onde até então não se havia chegado além de 240 metros.

### Foi confirmada a assinatura do armistício

Os rumores que circularam há pouco tempo sobre a propalada tregua entre as tropas combatentes na grande muralha foram, facilmente confirmados com a assinatura do armistício no dia 30 de mes passado.

O pacto que foi assignado em Tan Keu pelos representantes militares da China e Japão, estipula o seguinte:

1º — Desmilitarização da zona limitada ao norte da Grande Muralha, a leste da linha Pekim-Mukden e a oeste da linha Pekim-Sui-Yuan; 2º — Dissolução, na mencionada zona, dos corpos de voluntários chineses. Esta organização não mais deverá receber, por outro lado, nem estimulo nem apoio das autoridades chinesas; 3º — Restabelecimento do tráfego ferroviário entre Pekim e Tchau-Har-Kuan.

As delegações das duas partes estudam presentemente a questão

### Reinicio do intercambio comercial

Um comunicado da Agencia Havas, procedente de Osaka, noticia que a Agencia Rengo informou que o armistício sino-japonês foi assinado no dia 31 do mês passado e já se está notando grande actividade nas transacções comerciais dos dois países.

Alada há pouco o vapor japonês "Chosa Maru" tinha deixado Osaka para Tien-Tsin com grande carregamento de algodão e outros produtos.

Por sua vez, as fábricas de tecidos de algodão de Tien-Tsin e Tsing-Tao estavam prestes a voltar á actividade de antes da guerra.

### Foi raptado o filho de um ministro mandchú

Continuam a verificar-se os casos de rapinagem nas regiões mandchus. Talvez os autores do novo raptor ora verificado sejam os mesmos que há pouco tempo raptaram vários officiais britânicos.

Um filho do ministro das Finanças do Mandchú-Koku, de nome Sun-Sien, com 21 anos de idade, foi raptado na noite passada, por seis bandidos, que também levaram documentos e objectos no valor de 70.000 yens.

A quantia que os raptadores exigiram pelo resgate do prisioneiro é fabulosa. 3.000.000 de yens.

### O trabalho do sericicultor durante o Inverno

Estamos no mês de Junho. Mez propicio á amoreira, principal alimento do bicho da seda, e por esse motivo não é demais algumas recomendações sobre essa planta, e os cuidados que elle necessita, de acordo com o que publicou o orgão "Sericultura" de Campinas.

Logo chegaremos ao termo da época da criação dos bichos da seda deste anno, a qual foi um grande sucesso da sericicultura brasileira. Podemos constatar com a maior satisfação, que o trabalho deste anno não deu só um poderoso aumento da produção total, como também a maior parte dos criadores empregou nas criações os métodos mais modernos.

Assim melhoraram elles bastante a qualidade do producção e aumentaram bem o rendimento particular. Milhares de lavradores formaram amoreiras de novo, para entrar como colaboradores na Indústria de Seda Brasileira, na proxima safra.

Mas nós não podemos ficar neste ponto, em que estamos actualmente, quando queremos progredir. A nossa divisa deve ser "ir para a frente", isto é, melhorar e aumentar as nossas criações. Para alcançar este intento, cada sericicultor tem a fazer certos trabalhos durante o tempo seco, de sorte que, quando começar a primeira criação no mês de Setembro, se ache tudo em condições, que garantam um bom resultado da proxima safra.

Estamos no melhor tempo (Junho) para plantações novas de amoreiras. A vegetação começa a entrar em repouso. A amoreira despe-se de suas folhas. Plantamos agora estacas de amoreiras; aparecem fenóvos bem pequenos, os quais, depois de pouco tempo se lenhificam. Parece que a planta não quer crescer. De facto, as partes fóra da terra, quasi não se desenvolvem, mas nas partes subterrâneas acontece o contrário: o sistema radicular mostra um bom desenvolvimento. Chega a primavera, a amoreira plantada no princípio do inverno, começa a vegetar de novo, e forma rapidamente renovos fortes. Devido às raízes estensas e em grande numero, a planta é capaz a abastecer-se com bastantes substâncias nutritivas; cresce ligeiro e tem uma boa robustez.

### Forte explosão de grisu

Em Sakito, perto de Sasebo, numa das minas de carvão ha tempos explorada, verificou-se, sexta-feira proxima passada, uma violenta explosão de grisu, o terrível gás causador de tantas e horríveis mortes.

Resultou dessa explosão a morte de 46 trabalhadores e mais 30 sahiram gravemente feridos.

### Visita de um couraçado norte-americano

Deu entrada a 2 do corrente no porto de Yokohama o couraçado americano "Houston", arvorando o pavilhão do almirante Taylor, comandante em chefe da esquadra do Pacífico. Numerosas personalidades japonesas e americanas foram a bordo saudar o almirante e demais officiales do navio. Pouco depois, o almirante Taylor, acompanhado de seu estado maior, desembarcou e fez uma visita ás autoridades navais.

A noite a municipalidade ofereceu um banquete em honra do almirante e da oficialidade do couraçado.

### Impressos?

Procure a

### TYP. "NIPPAK"

Rua Liberdade, 146

São Paulo — — —

O contrario acontece, quando a amoreira é plantada no tempo da plena vegetação (Dezembro, Janeiro e Fevereiro). A planta forma rapidamente galhos e folhas, mas para o desenvolvimento necessário das raízes ella não tem a força, pois a primeira função exige a maior parte da energia disponivel. E exposta esta amoreira durante um tempo seco aos raios quentes do sol, ella morre, pois por causa da falta d'un sistema radicular normal, e é incapaz de substituir a agua evapotada pelas folhas. Arrancamos uma destas plantas mortas, e vemos poucas raízes finas de pouca extensão: 2 a 3 cm.

Para fazer boas grandes criações na proxima primavera, precisamos ter á disposição bastante folhas de boa qualidade e duma certa idade. Toda isso temos completamente nas nossas mãos. Dando á amoreira uma poda racional, desde de 15 de Maio até o fim do mês de Junho, ella recomenda o nosso trabalho com abundância de folhas duma qualidade como desejamos. A poda "racional" o que significa isso? Não maltratar a arvore. Não se faz este trabalho, do qual dependem em futuro as boas colheitas de folhas, com a faca ou faca de ceifar. Estas ferramentas racham os galhos, e estas partes prejudicadas não produzem mais, pois secam. Ao contrario de a planta aumentar a producção diminue-a. Os unicos instrumentos com os quais se pode fazer uma poda racional, são a tesoura e o serrete.

Amoreiras em terras fracas ou exgotadas exigem indispensavelmente uma adubação. Os adubos, que o lavrador pode alcançar mais facil e com as menores despesas, são de origem orgânica, como capim, palha de arroz, casca de arroz, palha de café, serradura, esterco de curral etc. — Estas substâncias em grande quantidade podem ser espalhadas igualmente em camada grossa na superfície do solo. Em quantidades pequenas, é aconselhável a enterra-las.

Segundo se os processos acima descritos o sericicultor terá garantida a sua ração para os bichos da seda.

### O Brasil, o Japão e o algodão

Sob o título acima publicou o "Correio da Manhã", do Rio.

Refletem-se em jornais paulistas os bons efeitos da visita do embaixador japonês a São Paulo. Como se sabe, a corrente imigratória nipônica para o vizinho Estado é já notável, sendo igualmente importante a nucleação desses colonos em vários centros agrícolas. Os japoneses localizados em São Paulo se dedicam, de preferência, à cultura do algodão, matéria prima de que o opulento país do oriente faz grande consumo.

E essa cultura não é muito adaptável ao território nipônico, motivo pelo qual a indústria japonesa, representada por numerosas fábricas em franca actividade, procura obter fóra do país a matéria prima de que carece. Dizem as estatísticas que em 1930 o Japão importou 1.262.000.000 libras, correspondentes a três milhões de fardos de algodão.

Em valor, representa essa importação de um anno 178.000.000 dólares ou aproximadamente, em nossa moeda, 2.300.000 contos, pelo cambio em curso.

Comparando cifras: o Japão importou em 1930 algodão equivalente a toda a nossa exportação exterior de 1932. Quem nos dirá que em breve não virá o Japão buscar no Brasil a maior parte dessa matéria prima?